投稿論文

在日朝鮮人コミュニティにおける朝鮮学校の役割についての考察

朝鮮学校在学生を対象としたインタビュー調査を通じて

曹 慶錦 東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター

キーワード:在日朝鮮人、朝鮮学校、コミュニティ

本論文の目的は、朝鮮学校で学ぶ在日朝鮮人が帰属するコミュニティにおいて、朝鮮学校が果たす役割を把握することである。これまでの先行研究では、在日朝鮮人が集住する地域としての在日朝鮮人コミュニティの存在が指摘される一方で、それとは別に、朝鮮学校在学経験者らの帰属の対象としての朝鮮学校系コミュニティの存在が指摘されてきた。朝鮮学校在学生を対象としたインタビュー調査を通して、彼らは在学体験を共有し、互いに関係を結ぶことでコミュニティの成員となることが明らかになった。朝鮮学校は、朝鮮学校在学経験者が帰属する独自のコミュニティが存在する上で必要な、人々の関係の結節点としての役割を果たしているのだ。

1 はじめに

朝鮮学校の周辺が騒がしい。ここ数年では、2010年4月から実施された「高校無償化」の対象に、朝鮮学校を含むか否かで議論が交わされている。2009年12月の京都朝鮮第一初級学校に対する誹謗中傷のような、朝鮮学校に対する排斥的言動も散見される(2009年12月18日付『東京新聞』)。良かれ悪かれ注目を集める朝鮮学校であるが、その実態は未だに十分に知られているとは言えない。

朝鮮学校は在日朝鮮人*1を対象とした全日制の学校である。植民地統治時代に朝鮮語を学ぶことのできなかった在日朝鮮人の子どもたちに朝鮮語や朝鮮の歴史を教えるために、1945年8月15日の終戦直後から作られた寺小屋式の「国語教習所」にその起源をもつ(金,2004)。教育目的は「朝鮮民族としての自覚と誇りをもって堂々と未来を切り開いていける人材を育成」(卞=全,1988:178)することとされており、授業科目には朝鮮語や朝鮮史が組み込まれている(ウリハッキョをつづる会編,2001:139-141)。

日本の学校制度に合わせて6年・3年・3年制をとっており、2010年4月時点で、日本の小学校に相当する初級学校55校*2、中学校に相当する中級学校33校、高校に相当する高級学校10校、他に大学相当の大学校が1校ある。法的には「各種学校」として位置づけられている。運営母体は朝鮮民主主義人民共和国を支持する在日本朝鮮人総連合会であるが、国籍等にかかわらず全ての在日朝鮮人を教育対象としているため、外国人登録上の朝鮮・韓国籍だけではなく日本国籍その他の学生も在学している。1960年代に3万5,000人を超えた学生数は、近年は約1万人程度になったとも言われてい

る*3。

現在,朝鮮学校で学ぶ者の割合は同年代の在日朝鮮人のなかでも小さく,大多数の在日朝鮮人は日本学校に通っている。日本学校で学ぶ者の多くが,他の在日朝鮮人との関係に乏しい傾向にあると言われて久しい(姜,1976:34)。その一方で,朝鮮学校で学ぶ者はこれとは異なる特徴をもっていると指摘されている。

若年世代の在日朝鮮人を対象に聞き取り調査を行った福岡安則は、朝鮮学校在学経験者らの特徴の一つとして、「彼ら/彼女らの生活空間は、在日朝鮮人社会に限定される傾向が強い。したがって、日本で生まれ育ちながら、親しい人間は同胞の朝鮮人だけである場合が珍しくない」(福岡、1993:94)という。朝鮮学校在学経験者らを中心に聞き取り調査を行っている韓東賢は、朝鮮学校在学経験を有する小説家を取り上げた分析において、小説家の執筆のモチベーションに「朝鮮学校コミュニティ」(韓、2005:221)に対する肯定感があることを指摘する。

「在日朝鮮人社会」、「朝鮮学校コミュニティ」という言葉で表わされるコミュニティに帰属しているという朝鮮学校在学経験者に対する指摘は、日本社会で在日朝鮮人同士の関係に乏しく生活しているという大多数の在日朝鮮人に対する指摘とは異なる。だが、これまでに行われてきた朝鮮学校在学経験者を対象とした調査研究には、朝鮮語や朝鮮史をはじめとする学校で実施されている教育内容や、在学経験者らのアイデンティティに関する分析はいくらか存在するが、朝鮮学校在学経験者が帰属するコミュニティと朝鮮学校の関係について集中的に分析したものは決して多くない。先に引用した福岡と韓の研究もアイデンティティ等を論ずることが主題であり、朝鮮学校とコミュニティの関係について詳細な説明が目指されているわけではない。そこで、本論文では朝鮮学校在学経験者が帰属するコミュニティにおける朝鮮学校の役割について、朝鮮学校在学生を対象に行ったインタビュー調査をもとに考察を試みる。コミュニティにおける朝鮮学校の役割といっても、それは多岐にわたるだろうから、その全てをこてで論ずるのは不可能である。そこで朝鮮学校在学生がコミュニティを体験する上で果たす朝鮮学校の役割という点に焦点をあてる。このような検討は、若年世代のコミュニティへの参入という論点に、さらにはコミュニティの存続という論点に連なるものと言えるであろう。あわせて、その過程で知りうるものに限り、朝鮮学校在学経験者が帰属する独自のコミュニティの特徴についてふれる。

記述の順序としては、朝鮮学校在学経験者が帰属するというコミュニティに関する実証的研究が乏しいため、まずは朝鮮学校に限らない在日朝鮮人全般のコミュニティに関する先行研究について概観する。それと共に、コミュニティ一般に関する議論も合わせて検討することで、朝鮮学校とコミュニティの関係を考察する際に参考となる論点を見出す。その上でインタビュー・データを分析し、最後にまとめとして結論を提示する。

2 在日朝鮮人コミュニティに関する先行研究の検討

朝鮮学校在学経験者に限定しない在日朝鮮人全般を対象としたコミュニティ研究は、かなりの数が蓄積されている。たとえば谷富夫の研究はその一つである。谷はかなり早い時期から、エスニック・コミュニティ研究において、異なる民族の「比較」にとどまらず、民族間の「関係」を問うことの必要性を強調している(谷、1992)。なぜならば谷が調査対象とした在日朝鮮人集住地域として有名な大阪市生野区ですら、在日朝鮮人だけで地域社会が成り立っているわけではなく、そこにも日本人は存在し、

日本人と在日朝鮮人の間で関係が結ばれているからである。その後も、この「民族関係」の類型論を生かした研究が行われ、在日朝鮮人コミュニティの生活実態の把握が進んでいる(谷、1995;谷編、2002)。

谷(と共同研究者ら)によって彫琢された「民族関係」に関する分析枠組みは後続の研究でも援用されており、たとえば谷の共同研究者の一人である二階堂裕子はこの視点を踏まえつつ、複数の民族の間で行われる地域福祉活動の実態を把握すると同時に、両者の共同活動の発展可能性を展望した(二階堂,2003)。高智富美は日本人、在日朝鮮人、ニューカマーの三者の間の「民族関係」を踏まえた上で、大阪府八尾市における在日朝鮮人の教育運動を調査・分析している(高智,2005)。また、これらとは別に、東京都荒川区を調査地域として、オールドカマーとニューカマーらの関係に着目した田嶋淳子の業績(田嶋,1995)や、兵庫県神戸市長田区を対象に震災後に展開された在日朝鮮人らの復興活動を分析した文貞實の研究(文,2000)等がある。

このように多様な主題をもった在日朝鮮人コミュニティー般に関する先行研究であるが、一見しただけで指摘できる共通点がある。それは分析単位として、在日朝鮮人の居住密度が比較的に高い在日朝鮮人集住地域が扱われていることである。大阪府大阪市生野区を筆頭に大阪府八尾市、東京都荒川区、兵庫県神戸市長田区などは、在日朝鮮人集住地域として知られている地域である。

だが、ここで二つの点を考える必要がある。

一つは、在日朝鮮人の多くが在日朝鮮人同士の関係性に乏しく暮らしているという指摘が示唆するように、在日朝鮮人のなかで集住地域に居住する者の割合が決して大きくないだろうことである。それでは在日朝鮮人のうち集住地域居住者はどの程度の割合を占めるのか。実は在日朝鮮人集住地域は日本の行政区分と必ずしも一致してないため、その地域の在日朝鮮人居住者数を把握するのは難しい。一例として先行研究がとりあげた在日朝鮮人集住地域の人口比をまとめた表1をみてみる。

表 1 2010年における在日朝鮮人集住地域の人口比率

	A:総人口	B:韓国・朝鮮籍人口	C : 比率 (B/A)
東京都荒川区	203,296人	3,775人	1.9%
大阪府大阪市生野区	134,009人	20,753人	15.5%
大阪府八尾市	271,460人	3,028人	1.1%
兵庫県神戸市長田区	101,624人	4,708人	4.6%
日本全国	128,057,352人	423,273人	0.3%

出典:総務省編『国勢調査 平成22年版』

地域の総人口および韓国・朝鮮籍人口は平成22年(2010年)『国勢調査』を参照した*4。どの集住地域も韓国・朝鮮籍保有者の比率は全国平均の0.3%を上回っており、なかでも生野区は15.5%ととても高い数値を示している。だが、生野区のこの数値ですら、朝鮮人だけが暮らしているというには心もとないものである。他の地域の数値はさらに小さい。先行研究でとりあげられた在日朝鮮人集住地域が上記行政区の中のさらに小さな一地域にすぎないため、行政区全体として人口を均すと小さな数字になってしまうのだ。このように在日朝鮮人集住地域人口を正確に把握するのは難しく、当然、在日朝鮮人全体のうちの割合も上記統計資料から読み説くのは難しい。

そこで参考になるのが福岡安則と金明秀の協力のもとに在日本大韓民国青年会(以下,青年会)が

1993年に行った質問紙調査である(福岡=金, 1997)。日本生まれの18歳から30歳の韓国籍保有者を母集団として、サンプルの抽出に青年会が保有する名簿を用いたこの調査の結果によると、町内を目安にして、12歳の頃に回答者自身が同胞多住地域と認識していた地域に住んでいたと答えた者は15.5%であるという。ほかに多住地域ではないが10軒以上の在日朝鮮人家族が存在したと答えた者が10.1%であり、両者を合計しても25.6%である。調査対象が一定の年齢層の韓国籍保有者に限られているとはいえ、この調査の結果は一つの有力な参考値になる。少なくとも、朝鮮学校在学経験者も全員が集住地域居住者などではなく、散住地域出身者の割合が一定以上を占めると想定するべきだろう。

考えなくてはならないもう一つは、在日朝鮮人に限定せずに広くコミュニティ研究に目を向けると、そこでコミュニティという概念が指し示すものが、集住地域に限られていないということである。たとえばジェラード・デランティ (Gerard Delanty) はコミュニティ概念の多様な使用法が存在することを指摘し、そのなかの一つの立場として「コミュニティがコスモポリタン化され、新たな近接性や距離関係の中で構成されるグローバル・コミュニケーションや、トランスナショナルな運動、インターネットをめぐって、ごく最近登場したもの」(Delanty、2003:4=2006:6) があると指摘している。このように使われるコミュニティ概念には、特定のまとまりをもった地理的領域との結びつきは必ずしも含まれていない。要するにコミュニティという言葉が指し示すものは集住地域に限られるわけではないということである。そして、最も脱地理的領域化されたコミュニティの一つであるインターネット・コミュニティの成立が、非対面状況での密接なコミュニケーションを可能とするインターネット技術と深く関係していることが示唆するように、このようなコミュニティの多様な形態は、人々のコミュニケーションを媒介する技術や組織の特徴と大きく関連することは明らかである。

以上の二点を合わせて推測できることは、まずは他の在日朝鮮人がそうであるように、朝鮮学校在学経験者も全員が集住地域居住者であるわけではなく、相当程度が散住地域居住者でありうるということである。さらにはそのような散住地域居住者も含むものとしてコミュニティが成立している可能性があり、その形態はコミュニティ成員の関係の形成において朝鮮学校が果たす役割と関連しているかもしれないということである。これらを踏まえた上で、インタビュー調査から得られたデータをもとに分析を進めていく。

3 インタビュー・データの整理と分析

(1) インフォーマントの居住地域と通学時間

本論文では朝鮮学校のなかでも高等教育機関に相当する朝鮮大学校に在学する者を調査対象に設定した。朝鮮大学校の在学生のほとんどは朝鮮学校高級部卒業生であり、さらにはかなりの割合の者が初級部より朝鮮学校に通ってきた者たちである。そのため、最も長い朝鮮学校在学経験を有するだろうから、朝鮮学校に通うことから生じる特徴を色濃く備えていると想定できる。

日本各地の朝鮮学校の教員の担い手の育成を主な目的として1956年に設立された朝鮮大学校は、8学部体制の全寮制で運営されている(朝鮮大学校,2004:2)。法的位置づけは他の課程の朝鮮学校と同様に「各種学校」となっており、そのために朝鮮大学校を卒業したとしても厳密には学校教育法上の「大学」卒業資格を取得することはできない。在学生数は公表されていない。

このような学校で学ぶ学生21人に、コミュニティ体験についてインタビュー調査を行った*5。実際に

調査を行った時期は2004年である。 インフォーマントの主な属性の一覧は表 2 のとおりである。

	•			
表り	インフォ・	ーマント	の其木属	件一臂

年齢 (インタビュー時)	18歳~22歳	
性別	女性 6 人/男性15人	
世代	3世19人/3.5世(一方の親が3世)2人	
日本学校在学経験	なし	
親の朝鮮学校在学経験	一方の親のみ 5 人/両方の親16人	

全員が3世以降の世代であるインフォーマントらは、これまで初級部から一貫して朝鮮学校で教育を受けてきており、日本学校に在学したことはない。注目すべきは親の朝鮮学校在学経験である。両親ともに朝鮮学校在学経験を有するというのが16人、一方の親のみが有するというのが5人、結果、21人の全インフォーマントの親が朝鮮学校在学経験を有していた。これは朝鮮学校で世代的再生産が進んでおり、現在の在学生の多くが朝鮮学校在学経験者の子どもであるということを示唆している。

朝鮮大学校は全寮制であるため、インフォーマントの全員がインタビュー時は寮生活を送っていた。だが、朝鮮大学校に進学せず、高級部ないしはそれ以前の課程までしか通ったことのない朝鮮学校在学経験者の大多数は寮生活未経験者である。実際、インフォーマントも2名を除いては、高級部までは寮生活未経験であった。本論文は朝鮮大学校在学経験者だけではなく、それ以前の課程までの在学経験しかもたない者らも帰属するコミュニティを分析対象として想定している。そのためインタビュー・データのうち、朝鮮大学校での寮生活に固有の事柄は分析から除外した。よって本論文で導かれる知見には寮体験を必要とするものは含まれておらず、寮生活未経験者にも通ずるものである。

このような注意を踏まえた上で、インフォーマントらの朝鮮大学校入学以前の居住地域と初級部課程の朝鮮学校への通学時間を、まずは見ておく。インフォーマントたちの朝鮮大学校入学以前の居住地域に関するものとして次のようなコメントがある(以後、インタビュー・データに限り、引用末に性別とインタビュー時の年齢を記す)。

もう、同胞がめちゃくちゃいます。……大通りがあって、片側の地域ではみんな朝鮮人が住んでいるんです。みんな朝鮮人。……本当に、コリアン・タウンって言われています。……ハルモニ(注:おばあさん)たちが座って話しているのとかが、よく見えます。 (女性/19歳)

このインフォーマントの居住地域は、周囲の人々らの間で「コリアン・タウン」と呼ばれていたという。 この語りにおける特徴は、まず、自身の家の外で自身の家族・親戚以外の在日朝鮮人を目にすることが あたりまえのこととなっていることである。まさに在日朝鮮人の集住地域に関する典型的な語りの一つと 言えよう。

だが、今回話をうかがった者のうち、このような語りを行った、明らかな在日朝鮮人集住地域の出身者はこのインフォーマントを含めて4人にすぎない。他には集住地域ではないが、近隣に在日朝鮮人の複数の世帯が居住している地域の出身者が3人、例外的なものとして朝鮮学校勤務者の住宅寮居住経験者が2人の、計5人が存在するぐらいである。これら集住地域居住経験者、複数の在日朝鮮人が存在した地域の居住経験者、そして住宅寮居住経験者の計9人に共通の特徴は、自宅の近所に自身

の家族や親戚以外の在日朝鮮人の知り合いがいたということである。

それ以外の12人は非集住という意味での散住地域出身者である。散住地域出身者の12人は少なくとも近所に自身の家族・親戚以外に在日朝鮮人居住者はいなかった,あるいはいたかどうかわからないと述べている。それでは散住地域居住者である朝鮮学校在学経験者が,他の在日朝鮮人と知り合う契機は何だったのだろうか。それは端的に,「私は,朝鮮学校に通い始めて,朝鮮人の友人に会ったし。学校でしか出会ってないから」(女性/20歳)というような意見に代表されるように,朝鮮学校に通うことであるという。集住地域生活者と異なり,地域で在日朝鮮人と知り合う機会に乏しい散住地域生活者に,知り合う機会を提供するのが朝鮮学校の役割の一つであることがうかがえる。

それでは、そのような朝鮮学校に、インフォーマントらはどれほどの時間をかけて通学していたのか。 日本の小学校に相当する初級部時代の通学手段と通学時間をまとめたものが表3である。

通学手段と通学時間	人数			
徒歩・自転車で30分未満	8人			
電車・バス等の公共の交通機関を利用して30分未満	2人			
電車・バス等の公共の交通機関を利用して30分以上	11人			

表 3 インフォーマントの初級部時代の通学手段と通学時間

この表にあるように、インフォーマントらのうちの13人は電車やバスというような公共の交通機関を乗り継いで朝鮮学校に通っている。そのうちの2人は通学時間に90分以上を費やしていた。このように長時間を費やして電車やバスを乗り継ぐまでして、インフォーマントらが朝鮮学校に通ったのは、朝鮮学校出身である親の意向が大きかったからと思われる。

そもそも半数以上のインフォーマントは、自宅の近隣では在日朝鮮人と出会うこともほぼない散住地域居住者であった。また、朝鮮学校に通うにも公共の交通手段を用いて長時間をかけていた。これらと合わせて考えると、朝鮮学校からの距離も遠い散住地域に居住していたインフォーマントにとって、在日朝鮮人同士だけの関係を確保できる空間は、学校と家という限られたものでしかなかったことになる。

このように半分以上のインフォーマントが散住地域居住者であり、長い時間をかけて通っていた朝鮮学校を介してしか在日朝鮮人との関係を結べなかった者たちである。彼らは散住地域に居住していたという点だけでみると、集住地域を主に取り上げてきた、朝鮮学校関係者に限定しない在日朝鮮人コミュニティに関する先行研究からはこぼれおちる存在である。

それでは、今回調査対象となったインフォーマントのうち、集住地域出身者のみがコミュニティへの帰属意識をもち、散住地域出身者は自らが帰属するコミュニティの存在を否定するのだろうか。インフォーマントへのインタビューによると、それは違う。大学入学以前の居住地域が集住地域か散住地域かの違いにかかわらず、全てのインフォーマントが「同胞のコミュニティ」(女性/21歳)、「同胞社会」(女性/20歳)、「在日朝鮮人社会」(男性/20歳)というような言葉で自らの帰属先の存在を表明していた。このインフォーマントが帰属先として指し示すものこそが、朝鮮学校在学経験者らに関する先行研究で触れられていた、朝鮮学校在学経験者らに特徴的なコミュニティであると思われる(福岡、1993;韓、2005)。

ここまでの段階で、朝鮮学校在学経験者のコミュニティは、その内に散住地域出身者を多分に含ん

だものであることは明らかと思われる。そこで、これ以降では、散住地域居住者を内に含むコミュニティ における朝鮮学校の役割を捉えるために、インフォーマントが朝鮮学校で形成する在日朝鮮人との関係 に関する語りを分析していく。

(2) 在日朝鮮人同士の関係の形成における朝鮮学校の役割

たとえ居住地域で在日朝鮮人と出会う機会がない者も、朝鮮学校に通うことで在日朝鮮人との関係を築いている。朝鮮学校での人間関係の性質に関しては次のような語りがある。

良い友人が集まるって言ったらおかしいですけど、友人関係では朝鮮学校がとてもいいと思います。やっぱり父親とか見ていても、そういう学校時代の同級とまだつきあっているじゃないですか。 社会に出ても、つきあいがある友人っていうのは、やっぱ貴重だと思います。 (男性/20歳)

ここで朝鮮学校での在日朝鮮人同士の関係性の特徴の一つとしてあげられているのは、友人関係の 親密さである。さらに重要なのは、朝鮮学校在学経験者である自身の親の姿などを通して、朝鮮学校 での友人関係の親密さが在学期間だけに限られるのではなく、卒業後も持続しうることを知っているこ とである。別のインフォーマントは、親密な友人関係というものは同級生同士の関係に限られるのでは なく先輩・後輩にまでおよぶことを指摘する。また、学生に限らず教員との関係も密であることがうかが える。たとえば「よい先生」と出会ったと述べるインフォーマントは、朝鮮学校での教員と学生との関係 を、某有名ドラマと照らし合わせて「金八先生とか、そういう関係みたい」(男性/21歳)と表現する。

このような学校内の関係性として、「友人」と「教員」との親密さに関する何らかの肯定的意見は、全てのインフォーマントから聞くことができた。先輩・後輩を含んだ「友人」と「教員」ということは、朝鮮学校に存在するほとんどの人間と親密な関係を築きうるということになる。しかも自身の両親の姿を通して、朝鮮学校での親密な関係が卒業後にも継続することを期待してもいるわけである。

朝鮮学校在学生らにとって初級部から中級部、高級部、さらには大学校へと課程が進むごとに、関係を結ぶ対象の範囲が拡大する。この範囲の拡大こそが朝鮮大学校の長所だと指摘するインフォーマントは多い。実際に朝鮮大学校在学中のインフォーマントからは、「朝大(注:朝鮮大学校)は全国から集まるっていうのが、一番いいと思います」(男性/20歳)というようなものに類似する意見が多々聞かれた。朝鮮学校の初級部は、北は北海道、南は九州までの日本の各地に55校が存在する。そこから中級部に進学することで33校に集約され、さらに高級部に進学する際には10校*6に集約される。この高級部の段階では北海道地方、東北地方、関東地方、中部地方、関西地方、中四国地方、九州地方というような単位で人が集まり、関係が結ばれる。そして、大学校になるとそれがさらに1校に集約される。たとえ自宅の周囲に朝鮮人が全くいない地域の出身者であっても、朝鮮学校に通い、朝鮮大学校まで進学することで、日本の各地から集まった朝鮮人との関係を築くことができるようになる。先のインフォーマントの語りは、このような人の流れのなかで見出せる朝鮮大学校の特徴を指摘したものである。さすがにこのような人間関係が構築される対象範囲の広さは、朝鮮学校のなかでも朝鮮大学校が最も大きいが、各地の高級部までの朝鮮学校でもその範囲は多少狭くなったとしても、集住地域などをはるかに超えた範囲で朝鮮人同士の関係を結べることに変わりはない。

また、散住地域出身者のインフォーマントは朝鮮大学校での朝鮮人との出会いについて、次のように

語る。

……朝鮮大学に入って感じたんですが、友人が親戚の友人の子どもだったとか。……それと姉とかの話を聞くと、商工会(注:在日本朝鮮商工連合会)の実習に行って、同胞の家とか行くと、在日朝鮮人というだけで、暖かく歓迎してくれるじゃないですか。そういうところがいいというか、仲むつまじいって思いました。 (女性/20歳)

ここでは現在の朝鮮学校在学生らの親自身が朝鮮学校出身者なので、朝鮮学校で初めて出会う者 同士でも、親や親族をたどるとどこかで知り合いにつながりうることが示唆されている。さらには、実 習などで見知らぬ土地の、世代も異なる在日朝鮮人と出会っても、朝鮮学校在学経験という共通項を 通じて順調に関係を結びうることが期待されている。要するにインフォーマントらは朝鮮学校を介して、 朝鮮学校関係者らのネットワークに連なることができるのである。このようにインフォーマントだけでなく 親も学んだ朝鮮学校は、世代を超えた日本各地の朝鮮学校関係者らのネットワークの結節点としての 役割を果たしていることがわかる。

次節では、インフォーマントをはじめとする朝鮮学校在学経験者らが、朝鮮学校を介して朝鮮学校 関係者らと地域と世代を超えたネットワークを結ぶなかで、我々意識をもつにいたる際にみられる一つ の事例として、スポーツという分野で自身らの代表を見出す過程にふれる。

(3) 朝鮮学校を通じたコミュニティ体験と成員意識の形成

朝鮮学校に通うことで、親世代をも含めた日本各地の在日朝鮮人らとのネットワークに連なるインフォーマントらの姿をみた。そこから関係者らの間で我々意識をもつにいたる過程に分析を進めるために、自らが帰属するコミュニティの存在をインフォーマントが体験する契機という点から記述をはじめる。次のような語りがある。

体育大会をすると、必ず学父母*7とか見に来て。一大イベントじゃないですか。絶対に学父母が来て。……そういう姿を見て、「おお、同胞社会だ」って鮮やかに思います。芸術大会があると。 ……そういうのがあると、絶対に見に行くとか。 (男性/22歳)

ここで述べられている体育大会と芸術大会というのは朝鮮学校の学生らのサークル活動の一環として行われるイベントである。そのような大会には、出場する学生だけでなくその保護者らも応援に来場する。このように学生だけでなく保護者も巻き込んだ一大イベントに自らも居合わせるときに「在日同胞社会に属している」という実感をえるという。要するに、インフォーマントは朝鮮学校の学外行事を通して、コミュニティを体験しているのである。このような意見は他のインフォーマントでも多々みられた。

このサークル活動の大会――「在日朝鮮学生中央体育大会」、「在日朝鮮学生中央芸術競演大会」という正式名称には、「在日朝鮮学生」という言葉が組み込まれているが、実際の大会出場対象者らのなかには日本学校に在学する在日朝鮮人学生は含まれていない。これはあくまでも朝鮮学校在学生のみが参加する大会である。初級部、中級部、高級部ごとに各種目別に地方予選を勝ち抜いたチーム、個人が、年に一度、一つの地域(東京か大阪とその近郊)に集まって競い合う、朝鮮学校におけるサーク

ル活動の一つの大きな舞台となっている。これも先に述べた朝鮮学校を介して形成されているネットワークに依拠した一つの活動事例である。

インフォーマント全員が初級部から高級部まで何らかのサークルに所属していたことから、このような大会への出場を目指していただろうことがうかがえる。だが、そもそも朝鮮学校の全体数自体が決して多くないので、地方予選参加校が少なく決勝大会の出場のハードルは極めて低い。いきおい朝鮮学校(特に高級部)でサークル活動を行っている者は、年に一度、決勝大会に出場する日本全国の朝鮮学校の人々と一堂に会しているということになる。朝鮮学校在学生のなかでも初級部からこのような場を経験し続けてきた者にとっては、朝鮮学校の大会で朝鮮学校在学生同士が試合をするのは自明のこととされ、それに関する疑問すら起きないだろう。

インフォーマントの語りによると、このような場は何も学生だけのものではない。熱心な親は学生たちの体育大会、芸術大会に応援のためにかけつける。そして、その親たち自身も朝鮮学校在学経験者らである可能性が極めて高い。このような大会は、まざに日本の各地の朝鮮学校在学経験を共有する学生とその親らが一堂に会する場であり、そこに居合わせた者たちが、たがいに我々意識を醸成し、そしてコミュニティの存在を垣間見るということも十分にありうるだろう。実際、インフォーマントがこのような場をコミュニティの体験の契機とあげていることを考えるに、体育大会、芸術大会を開催することを可能にする各地の朝鮮学校を結節点とするネットワークが、在日朝鮮人コミュニティという体験を生み出すものとして機能しているとみてよいだろう。

朝鮮学校同士の間でのイベントを通じて作り出された、同一のコミュニティに帰属する者としての 我々意識は、日本学校をはじめとする朝鮮学校以外との関係において発露されるときもある。たとえば 高校に相当する高級部に関しては、1994年の全国高等学校体育連盟の決定以降、朝鮮学校在学生 もインターハイ等の日本学校を対象にする大きな競技大会に参加することが可能となった。それに関し て、あるインフォーマントは「サッカーとかボクシングとかでも、どこかの(朝鮮)学校がやっぱり(全国 大会に)行かないといけないなあって。そして、どこが行っても応援とかするから」(男性/21歳)と述 べる。朝鮮学校の大会で競い合っているからこそ、また、そこでの遭遇を通して朝鮮学校在学生同士 の我々意識が醸成されているからこそ、朝鮮学校のサークル活動の実力を示すためにも、日本の全国 大会に出場しなくてはならないとされる。そして晴れて予選を勝ち抜いた朝鮮学校は、日本全国の朝鮮 学校の、そしてコミュニティの代表として日本の全国大会に出場するということになる*8。だから出場校 以外の朝鮮学校の関係者も、どこの朝鮮学校であろうと出場校を応援するという意見が出てくるのである*9。

(4) コミュニティの成員資格と朝鮮学校の存続

たとえ周囲に朝鮮人のいない散住地域に生活していても、朝鮮学校に通うことで朝鮮人との関係を 結び、そして日本各地の在日朝鮮人同士のネットワークに連なるなかで、コミュニティを体験していくイ ンフォーマントたち。彼らは朝鮮学校に通ったからこそ、朝鮮学校関係者に独自の在日朝鮮人コミュニ ティの成員たることができている。インフォーマントもそれを充分に理解しているとわかるのが、自身ら が帰属するコミュニティの特徴をどのようにしたら理解できるのか、ということに関する次の発言である。

感覚的なものじゃないですかね、ハッキリ言って。それは、もう、朝鮮学校に行ったり、同胞の

このインフォーマントは、自身が帰属するコミュニティの特徴はほぼ「感覚的」にしか理解できないだろうと述べる。そのような「感覚」を共有できる者とは朝鮮学校に通った経験を有するか、「同胞のなか」に住んでいる者に限られがちであるという。実際、このインフォーマント自身も散住地域出身者であり、朝鮮学校への在学を契機に在日朝鮮人との関係を築いている。このように朝鮮学校は朝鮮学校関係者間のネットワークを可能とするので、そのようなネットワークを内実に含むコミュニティの維持において重要な役割を果たしているのだが、別の面からすると、朝鮮学校在学経験を有さない者の多くはネットワークに連なっておらず、ゆえにコミュニティの成員でもなく、端的にコミュニティを理解できない者と捉えられかねないことがうかがえる。

また、コミュニティの維持において重要な役割を果たす朝鮮学校の存続が、自然と確保されるものではないことも、インフォーマントは理解している。それゆえに朝鮮学校の存続のために何らかの貢献を考えるインフォーマントもいる。朝鮮大学校在学生であるインフォーマントにとって、朝鮮学校の持続への貢献の一つの手段は自身が教員になることである。各地の朝鮮学校の教員養成という、朝鮮大学校の当初の設立目的と照らし合わせても、それは決して不可能なことでなく、現在も朝鮮学校で教鞭をとることを検討する朝鮮大学校在学生は決して少なくないという。だが、同時に朝鮮学校の運営の厳しさというものもあり、そのような条件と照らし合わせると、実際の教員のなり手は少なくなりがちであるという*10。自身の進路希望は教員とは全く別のところにあるが、同時に教員への誘いを受けているというあるインフォーマントは現在の心境を次のように述べる。

私,自分の母校が好きだし、地域の同胞が好きだし。狭い社会だから、知っている人がほとんどだから、私が運動会に行ったときも、「実習で帰ってきていたんだ」って、ひさしぶりに会った友人の母とかが、たくさん、そうやって私に声をかけてくれるし。……そう考えると、学校教育っていうのは、本当に重要だし。みんなが集まるところって言ったら、やっぱり学校だし。学校を拠点に活性化していくし、同胞社会も。そう考えると……自分に関係ないことではないでしょう。

(女性/21歳)

この語りには、コミュニティにおける朝鮮学校の存続の重要性に関するインフォーマントの認識が如実に示されている。コミュニティとつながる上で朝鮮学校の果たす役割が重要なのは何も朝鮮学校在学中の者だけに限定されるわけではない。朝鮮学校をすでに卒業した者らにとっても、自身の子どもの保護者として、あるいは時には催しの一参加者として、朝鮮学校という場を通して他の在日朝鮮人とつながることができるという点で、極めて重要なのである。逆に言うと、朝鮮学校の衰退は朝鮮学校関係者らのネットワークの弱体化、さらにはそれを内実に含むコミュニティの弱体化に直結する。それを知っているインフォーマントだからこそ、朝鮮学校の維持に教員として関与すべきか悩んでいると吐露している。他のインフォーマントも程度は違うが、コミュニティの存続を念頭におきつつ、朝鮮学校の維持・存続に関心を寄せており、何らかの貢献を行うことを検討していた。

4 まとめ

本論文では朝鮮学校在学経験者が帰属するコミュニティにおける朝鮮学校の役割について、朝鮮学校在学生を対象としたインタビュー調査の結果を用いながら記述した。

インフォーマントが示唆する、自身が帰属するコミュニティの存在。それは端的に言うのならば、朝鮮学校という組織に多分に依存するものであった。インフォーマントらは朝鮮学校の課程を進んでいくことで日本各地の出身の朝鮮学校在学生と出会い、さらには朝鮮学校在学経験者である親をはじめとする異なる世代の人々らとの出会いを重ねることで、朝鮮学校在学経験者らの関係の広がりを見ていく。また、日本各地の朝鮮学校在学生を対象とするスポーツや芸術の大会というような、現役の朝鮮学校在学生と朝鮮学校在学経験者であろう保護者らが集まる場に、インフォーマントらは何度も参加していた。このように、集住地域や散住地域の区別なく、日本各地の朝鮮学校在学経験者のネットワークを可能にする結節点として朝鮮学校は機能している。そして、このネットワークを通した活動のなかで、インフォーマントらはコミュニティの存在を体験している。

結果,北は北海道,南は九州までの日本の各地に散らばる朝鮮学校在学経験者たちのネットワークを内実に含む一大コミュニティが成立しているのである*11。このような朝鮮学校によって支えられたコミュニティが,大多数の在日朝鮮人コミュニティに関する先行研究が対象としてきた,在日朝鮮人集住地域という属地的特徴の色濃いコミュニティと性質を異にすることは明らかだ。

一方で、朝鮮学校在学経験者が独自のコミュニティに参入するためには、成員間の共通項である朝鮮学校在学経験を有することが重要であり、そのためには少なくとも朝鮮学校での在学という対面状況を一定期間持続しなくてはならない。また、卒業後も、朝鮮学校在学経験者がコミュニティに帰属し続ける際に、成員間の対面でのコミュニケーションが時に必要とされる。そのため、朝鮮学校在学経験者らのコミュニティは、在日朝鮮人一般のコミュニティのような高い密度での居住地域の集中を必ずしも必要としないが、特に在学期間は朝鮮学校とその周辺に制約されがちであるという点において、非対面状況が主であるインターネット・コミュニティほど地理的に自由ではない、と指摘できる。

本論文で述べたような,人々のネットワークの結節点として学校が機能し,このネットワークを内実とするコミュニティは集住という形態を必須の成立要件としないという指摘は,これまでの在日朝鮮人一般のコミュニティ研究などでは触れられてこなかった点であると思われる。ここに本論文の知見のオリジナリティがある*12。

本論文でとりあげた朝鮮学校在学経験者が帰属する独自のコミュニティは、朝鮮学校を結節点として形成される朝鮮学校関係者のネットワークを内実に含むという点だけをとってしても、「朝鮮学校コミュニティ」という名によって、集住を必要条件とする在日朝鮮人コミュニティ一般と区別されてよいだろう。このような独自のコミュニティの存続において果たす朝鮮学校の役割の重要性は、朝鮮学校在学経験者らにも理解されていた。これを踏まえると、朝鮮学校に不利益をもたらしかねない動きに対して、教員や学生だけでなく、親、卒業生を含めた広い範囲の朝鮮学校在学経験者らが異議申し立てに動く理由を推測することができる(たとえば2011年2月18日付『朝鮮新報』)。一連の動きは、教育の場の維持だけに限らず、コミュニティの存続のためのものでもあるのだ。

- *1 本論文では外国人登録上の「朝鮮」、「韓国」の表記にかかわらず、植民地時代の朝鮮半島にエスニックな起源をもつ 人々を「在日朝鮮人」と総称する。
- *2 鶴見朝鮮初級学校は2010年4月時点で、実質的には併設されている幼稚班だけの運営となっているので、この数字に含めていない(鶴見朝鮮初級学校ホームページより、http://kanagawa.pekdu.ac.jp/user/tsurumi/)。
- *3 1960年代の学生数は金徳龍の著作(金,2004:274)による。近年の朝鮮学校在学生数は未公表のため、正確なところはわからない。参考となる数字のなかで最も新しいものとして、朝鮮大学校の教員である朴三石によるものがある(朴,2011)。それによると幼稚園に相当する幼稚班を含めた朝鮮学校全体の学生数は約1万人であり、うち高級部に在学する者が1,800人とある。また、現在までの朝鮮高級学校の卒業生は約10万人、朝鮮大学校の卒業生は約1万5,000人ともいう。ただし、朴によるこれらの数字がどのような資料に基づいたものなのかは不明である。
- *4 『在留外国人統計』平成23年版では、2010年の韓国籍・朝鮮籍人口は565,989人であり、そのうち植民地時代からの居住者とその子孫が大多数を占める特別永住者は395.234人となっている。
- *5 調査は朝鮮学校での体験を中心に、アイデンティティの形成とコミュニティへの帰属意識との関係をテーマに論文執筆者が独自に企画したものである。調査対象者はテーマと関連して、朝鮮学校在学経験者のなかでも、最も長い日数の学校在学経験を有しているだろう朝鮮大学校在学生とした。あくまでも独自調査なので卒業生ならびに在学生の仲介者を通してインフォーマントを募った。インフォーマントとなる上での条件は特に設けなかった。基本的属性等について質問紙を用意した上で、それをもとに調査テーマに関連する話題をなげかける形でインタビューを行ったが、インフォーマントからの自由な発言も聞いていった。事前に用意した議題とインフォーマントの自由な話題との比率は、概ね1:2ぐらいであった。そのためインフォーマントのライフストーリーと関わる、多様な事柄が把握できたが、そのなかでも本論文では学校体験とコミュニティへの帰属との関連についてのみデータを利用している。インフォーマントの家族にはじまり、日本学校在学在日朝鮮人に対する認識、日本社会への認識、自身の進路等については、稿を改めて論ずることとする。なお、エスニック・アイデンティティの形成に関する分析はすでに発表している(曹、2011)。本論文で利用されているものも含め、インフォーマントの発言内容については、調査後にすべて本人たちに確認をもらっている。
- *6 インフォーマントが高級部をすごした時代は12校。
- *7 朝鮮語での発音は「ハクプモ」。朝鮮民主主義人民共和国の社会科学出版社から1992年に出版された『朝鮮語大辞典』 によると、学生の父母という意味。インタビュー時の使用言語はインフォーマントの選択にまかせたところ、全員が日本語で受け答えを行ったが、朝鮮語の単語が一部に混在した。
- *8 雑誌『イオ』2011年2月号は、第90回全国高等学校ラグビーフットボール大会に大阪代表として出場し、2年連続ベスト4の成績を残した大阪朝鮮高級学校ラグビー部について、「選手たちは大阪の代表でもあり全国の朝鮮学校の代表でもある」という同部OBの声を伝えている。
- *9 雑誌『イオ』2001年2月号は、第79回全国高校サッカー選手権大会に初出場した大阪朝鮮高級学校サッカー部を応援するために、日本各地から7,000人の在日朝鮮人が試合会場の神奈川県等々力陸上競技場に集まったと伝えている。
- *10 朝鮮学校の財政的苦境については、多くの先行研究でふれられている(ウリハッキョをつづる会編, 2001;金, 2004)。 なお、朝鮮学校の財政状況の悪化は、ここ数年だけの問題でない。確かに近年の状況の悪化は著しいが、設立当初から状況は良くなかった。
- *11 少なくともインタビュー調査を通して本論文で把握されたコミュニティは朝鮮半島とは区別されるものであった。
- *12 本論文ではコミュニティの存立において朝鮮学校が果たす役割に主な焦点をあてる一方で、成員たちの多様な生活実態をはじめとするコミュニティの諸相については限定的にしか論じられていない。今後の課題としたい。

《参考文献》

- ・曺慶鎬, 2011「『朝鮮学校コミュニティ』とエスニック・アイデンティティー朝鮮学校在学生を対象としたインタビュー調査を通じて」『ソシオロゴス』Vol.35, 96~110頁
- ・朝鮮大学校編, 2004 『朝鮮大学校 (パンフレット)』 朝鮮大学校
- Delanty, Gerard, 2003 Community, London: Routledge (山之内靖=伊藤茂訳, 2006『コミュニティーグローバル 化と社会理論の変容』NTT出版)
- 韓東賢、2005「メディアの中の『在日』と『朝鮮学校』、そのリアリティのありか」『現代思想』33巻4号、青土社、214~223頁
- ・福岡安則、1993『在日韓国・朝鮮人―若い世代のアイデンティティ』中央公論社

- ・福岡安則=金明秀, 1997『在日韓国人青年の生活と意識』東京大学出版会
- ・姜在彦、1976「在日朝鮮人の六五年」『季刊三千里』8号、22~37頁
- ・金徳龍、2004『朝鮮学校の戦後史-1945-1972 (増補改訂版)』社会評論社
- ・高智富美,2005「外国人多住都市における教育運動とエスニック・アイデンティティー大阪府八尾市Y地区の在日韓国・朝鮮人を事例として」大阪市立大学社会学研究会『市大社会学』No.6,45~63頁
- ・文貞實, 2000「震災とエスニシティー神戸市長田のケミカルシューズ産業の再生と共生のまちづくり」 『地域社会学会年報』12集、55~78頁
- 二階堂裕子,2003「地域福祉活動による異民族との共同の可能性一大阪市生野区の事例から」日本社会分析学会『社会分析』30号,113~129頁
- ・朴三石、2011 『教育を受ける権利と朝鮮学校―高校無償化問題から見えてきたこと』日本評論社
- ・ 下喜載 = 全哲男, 1988 『いま朝鮮学校で―なぜ民族教育か』朝鮮青年社
- ・田嶋淳子,1995「世界都市・東京にみる重層的地域社会の現実」 奥田道平編『コミュニティとエスニシティ』 勁草書房,146~170頁
- ・谷富夫、1992「エスニック・コミュニティの生態研究」鈴木広編『現代都市を解読する』ミネルヴァ書房、260~283頁
- ・谷富夫,1995「在日韓国・朝鮮人社会の現在一地域社会に焦点をあてて」駒井洋編『定住化する外国人』明石書店,133~161頁
- ・谷富夫編,2002『民族関係における結合と分離―社会的メカニズムを解明する』ミネルヴァ書房
- ・ウリハッキョをつづる会編、2001 『朝鮮学校ってどんなとこ?』社会評論社
- ・朝鮮新報社『イオ』2001年2月号, 2011年2月号
- ·朝鮮新報社『朝鮮新報』2011年2月18日
- ・東京新聞社『東京新聞』2009年12月18日
- ・入管協会『在留外国人統計』平成23年版
- ・統計局HP内『平成22年国勢調査』(http://www.e-stat.go.jp/estat/html/NewList/000001039448/GL08020101-000001039448.html#t2_000001045010, 2011年11月25日アクセス)

A Study of the Role of Korean Schools in the Korean Community

Using an Interview Survey among Students at Korean Schools

CHO, Kyongho
Tokyo University of Foreign Studies

key words: Korean in Japan, Korean school, community

The purpose of this study is to understand the role Korean schools play in the Korean community. A "Korean school community" is a community to which students of a Korean school belong. Based on interviews with current Korean students in Japan, the results indicate that the Korean school community is formed by the students sharing their experiences at Korean schools. In essence, Korean schools serve as hubs for the Korean school community.